

昭和二十七年五月二十三日
第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第一五八号）

慈光

第十四卷

第五號

目

次

教行信証『信卷』三信釈（一）	近角常観（1）
釈尊の生涯	福島政雄（5）
池山先生廿五回忌に	花田正夫（11）
斉藤与一郎翁	桑野淳城（14）
教えられる二つの言葉	松村繁雄（17）
堂の鈴	佐藤強三郎（20）

教行信証(信卷)三信釈(一)

近角常観

「至心釈」法然聖人と親鸞聖人

前席は私がお慈悲に気づかせて貰うという事が実に六ヶ敷しいので、既に前席でも申した如く、今迄説教を聞きつけて居らる方は、筋道の上より法門を聞かされ、聞いて聞いて聞き開いて、漸くに気が附くという気のつきようである。又青年の方や、實際人生に活動して居らる人達は、この法門を聞き開くというよりも、この人の實際問題に突き当たり、それより御縁に入らるという方が多いのであります。

此
あ処でこの二者、実は同じ事でありながら、それを一つに頂くということが、実に難いのである。設えば前席でお話したことでも、青年の方や世間の實際問題にたずさわつて居らる人、又説教を聞きつけて居らる方でも、一家なり、知り合い間の日常生活の實際問題で心を痛めて居らる方に向いては、必ず皆様の心の中に、何処か当たつたふしに

が有ろうと思われるのである。

処が平素「仏の本願はこうである。頂き心地は斯くである」と、こういう風に法門の上より聞いて居らる人から見たら、恰もかけ離れた世間話のように、いつもと違つて聞えたであらうと思ふのであります。

処がこの二つが別々にならぬように、よく気をつけて聞かなくてはならぬのである。青年の人や、世間の實際問題に当つて居らる方などは、人生方面を主にしてお慈悲を喜ばれ、南無阿弥陀仏という事も、この人生方面に就けては充分喜ばるるのであるも、阿弥陀仏の五劫思惟の御本願という事、仏が不可思議兆載永劫に菩薩の行を行じて御苦勞をなした下されたということが、どうも充分受取り難い、ということになるのであるし、又今迄説教を聞きつけて居られる人達は、今更法蔵菩薩の本願を疑うで無けれども、何時も御慈悲のことが、唯その事となり、我々の日常生活の浅間しき胸の中へ直接それを頂くということが、どうも軽いという風になるのである。

故にこの両者が別々にならぬように、能く気をつけて頂かねばならぬのであります。一昨日の席にてどなたかが、真俗二諦について聞かれたも実にこの味わいにて、實にかくの如き広大な御慈悲なれば、真にこのお慈悲を頂けば、どうしても日常生活を俗諦門の上に、それが現れて来なくてはならぬのである。真諦門の如来のお慈悲は、即ち我が俗諦の日常生活の浅間しき行為の上に現れて下さるお慈悲なれば、どうしてもここは日常生活の實際問題の上に頂かせて貰う処が、無くてはならぬのであります。

○
そこで私にしましては、前席申す如く、何故お慈悲の事は幼より充分承知しながらも、それが弥々となるまで何故真実に頂けなかつたのであるか。即ち今いう自分が實際人生の問題に突き当つて居ながらも、人生の實際問題とお慈悲ということと、別々のように思うて居たからであります。処がそれが前席言う如く、弥々の最後に於いて、私のこの浅間しき根性の上に、仏のお慈悲一つで安心させて貰うたのでありますが、殊に前席の話で肝腎なるは、私がこの人生に行き詰つて、自分が悪い／＼と苦しんだのが決して機^はの深信ではない。

併し私がお慈悲に気づかせて貰うたのは、私がそれ程までに悪い、其の悪い私の根性の底の底まで知り抜いて下さ

れて、それが可哀想であるとお見捨て無き広大のお慈悲に遇い、ここで、有難うと一辺に頂けたのである。ここで一辺に私の悪い奴が、遣る瀬なきお慈悲の前に「悪うござりました」と頭が下つたのであります。

前席では主に私がこの実人生の上に苦になつた筋道を話したのでありますが、その苦になつた私が、このお待ちかねのお慈悲を知らせて貰うなり、

「この広大なお慈悲、これ一つであつた。この広大なお慈悲を外にしてどうして安心が出来るものか」と、

又「今日まで人が悪いとばかり云つて居たのであるが、そう云う自分も悪いではないか。人が隔てると言つて居る自分が隔て心が止まなかつたでは無いか」と。

この私の悪い心を知り抜き、お見捨てなき広大のお慈悲に遇い有難やと頂いた時は

「今迄長々親様をお待たせして、自分の浅間しき心より色々不足を言つて居つたは、実に申訳なき事であつた」と、

と、親様に頭が下がると同時に、人生を不足に思い、人を悪しく思う根性の根が切れて仕舞つたのであります。ここに、お慈悲の徹到して下さつた一念には、どうしても、人を不足に思い、人を悪しく思う根性の根が切れ、止んで仕舞わなければならぬ処があるのである。ここは思い切り申さなくてはならぬのであります。

全体今まで法を聴いて居らるる人の中には、動もすると「我々この悪い根性の止まぬのが凡夫だから、この悪い心のままで往生させて頂くのである。悪い根性の者が悪いと知らせて貰つたのが有難いのである」と言う人がある。我々悪い者が、悪いと知れさえすればよいと言う丈では、仏の遣る瀬無きお心を頂いたという処がない。それは成る程煩惱故、我々の悪い根性はいつまでもあることはある。親鸞聖人も『正信偈』の中に、

貧愛瞋憎の雲霧常に眞実信心の天に覆えり。

と仰せられた。なれどもその次に、

譬えば日光の雲霧に覆わるれども雲霧の下明にして闇無きが如し。

この闇の取れた思いがなくてはならぬのであります。

我々のこの悪しき者を真にお見捨て無き広大のお慈悲と承り、「仏のお慈悲の遣る瀬なき、よくも／＼この浅間しき私を、それ程までに呆れもしたまわで」と頂く一念、「それ程までに長々御心配をかけたのであつたか」と夜が明ければ、この御見捨てなきお慈悲にあらずしては、人生に安心の仕て見ようは無かつたのである。しかるを今まで人に善くせよと、人に突きつけて居たは、仏の御力をそつちのけにして、人に持つて行つて居たものである。人が善

なり、人を不足に思う心が無くなつて仕舞うのであります。

○
なお又こういう事がある。殊に御婦人の方などは、人に不足もあろうが、それよりも「人に善くせねばならぬ、姑舅に善くつかえなければならぬ、隣人や親戚によくして行かねばならぬ」の思いが必ずある事と云います。それでこれ等の人が我が身の悪しさに気がつく、「これではならぬ、もつと善くしなければならぬ／＼」と更に一層心を努むるに至るのである。この思いが心にある中は、まだお慈悲に気がついたとは言われぬのであります。

成る程これでは我が身の悪しさに気がついたのではあるも、まだ何とかすれば善くなれるという気が遣つて居る。否善くなれないでも、せんければならぬと思つて居る。この心のある中は、まだ我が身の悪しさに真に頭が下つて居らぬのであります。

処が我々はそれが出来ぬ所がお慈悲の来て下さるもとなのである。汝等はそれが出来ぬ、出来ぬ所を仏は先知つて、それだから此のように心配して居るので無いか。「仏かねて知ろし召して、煩惱具^具の凡夫と仰せられたることなれば云々」。その出来ない事を初めより知つたればこそ、その者を見捨てぬ本願を建てたので無いか。然るにその出来ないことを自分でしようとしているのは、全体汝自

くしてくれぬから、仏のお慈悲が現れて下されたのではない。全体人が善くしてくれぬ／＼と、人に求めて居た自分が悪い。人をあてにし「もつと善く、隔てぬように」など、人に持つて行き、求めて居た自分が間違つて居たのである。「そう云う自分が人に對し、その通り出来て居たが、それを人にばかり言うて居たは、全く自分が悪い、人が悪いのではない」とお慈悲に氣のつく一念には、斯く人が悪いと思う心が無くなり、人を不足に思う事が無くなつて了うのである。

して人が無理を言おうとも、たといやだと思つても根本に人をあてにする氣が無くなる故、人を憎む心が起らない。又生死問題にしても「亡くなつた親を助けたい、死んだ小供について行きたい」など、離れられぬは、私を哀れみ下さる仏をすて、人間をつかまえて居るからである。

「成程、人をあてにするでない、世の中を当にするでない。今まで人々と云つて居つたのが大間違ひであつた。言うて居る自分の事を差し惜ひて、人の事を言つて居つたは、実に申訳がなかつた」と、我が身の悪しさが知らせて貰えるのである。なおここでも一つ言うことは、今まで人が悪いと言つて居たは、人が悪いでは無かつた、自分が隔てゝ居たのであつた。自分が隔てたのは、実にこの広大のお恵みまします事を頂かざりし故、と、お慈悲に氣がつく

分て仏になる根性で居るのか。自分で仏になれるなら自分でなつた方がよい。……『歎異鈔』には、

およそ惡業煩惱を断じつくしてのち、本願を信ぜんのみぞ、願にはこる思いもなくてよかるべきに、煩惱を断じなばすなわち仏なり。仏のためには五劫思惟の願、その詮なくやましきまさん。云々。

「善くしなければならぬ」というのは、道德的にはまことに感心なるも、まだ眞の落ち心地頂けて居ぬからであります。然るに仏はその善く出来ない者が可哀想故、その者のために苦勞する我が此の親心を能く知れとの、御仰せである。これを頂くと

「成程、今までこの私が善くせんらんと云うて居たは、大なる間違ひであつた。如何にも今までは甲にも善くする、乙にも善くすると、身の程忘れて高上りの申訳無き考を起して居たものである。しかるにこの広大のお慈悲を頂けば実にこの世の中に助けなく、善く出来ざる私の身なれども実にこの広大の親心ましますばこそである」と。これから善くしようとの考が全く無くなつた時が、真にお慈悲の頂けた時であります。で、昨日の席でも、或方が「善くせんらぬに出来ぬのは、自分の修養が足らぬからだ」と言われたも、我々が修養が足りないから善く出来ないのではない。鉄は如何程叩いても金にならぬのである。

我が如何程努めたつて、善くなられよう筈なき私の身なのである。然るに、その私が哀れであると、御見捨てなき私を、それ程までに「有難や」と、我々修養で善くなられるのでは無い。炭団の中まで真黒きその儘で、一点火がつくなり、全体が火がついて下さり、我々このして見よう無き者の心に、全体にお慈悲が入り充ちて下さるのがあります。で、このお慈悲の俗諦に顕れ下さる味わいは、

釈尊の生涯

涯

福島政雄

家族と教化

さて釈尊はその御入滅になります迄に四十四年と言う長い間み教をお説きになる。その間に色々な出家のお弟子も出来るし在家の信者もだん／＼出来てくる。その内でもそのお父さんのジョウボン王とかお妃であつたところのヤシヨダラ姫とかお子さんのラゴラ、そう言う御家族に皆釈尊のみ教が徹るのであります。これは又釈尊の非常にえらい方だと言う事を感じるのであります。やつぱり御覚りがえらいのであります。私共なんかの経験では家庭と言うもの

が一番六つかしいものであります。まして自分の妻や子が自分と全じ信仰にはいると言う事はなか／＼六つかしい。私の場合なんかそうでありました。私の事を申して済みませんけれども、私の家内はキリスト教でありましたものが近角常観先生の御導きで親鸞聖人のみ教に転じましたものであります。併し私を見ているところくでもない人間に見えるそうであります。そうでありますから私の力で自分の家族を、子供を、信仰の上でどうこうすると言う事はこれは

決して出来ません。これは親鸞聖人の仰言る通りなのであります。まして、実際自分の子供と言えども決して自分の思う通りになるものじやない。不思議な御縁があつてそこに御信心と言うものが起つて来るものである。それはまことの信心と言うものはなくちやならないけれども言うような事なのであります。実際そういうところから釈尊を仰ぎますと、今のように御家族はお父様も元の御妃もお子さんも皆その教に帰依される。これは余つ程偉い方でないといえないと言ふ事を感じますのであります。

提婆とカルダイ

そう言う風にしてまあいいお弟子もふえる、在家の信者もふえる。四十四年であります。ところが御承知のダイバダツタが問題であります。これは釈尊の従弟に当ると言う事なのであります。始めは釈尊のお弟子になつて後にはどうも釈尊のなさる事が物足りなくなつた。と言うのはちつと釈尊は寛大過ぎる、もちつと釈尊は教団と言うものを引きしめて行かれなくちや駄目だと考えて、そんな事を言うて見ても釈尊がお取り上げにならなかつたものですから、それではと言うので自分の教団をつくるんだと言うので、釈尊の晩年に釈尊の教団を離れたという事でありま

悪く取り扱われているのであります。おしまひには大地が裂けて生きながら落ち込んだと言うような風に、經典では伝説的にそう伝えられています。とにかくそう言う問題があつてそのダイバダツタが御承知の通りアジヤセ太子をそそのかしてビンバシヤラ王をあやうい目にあわせて、併しあんなにして結局釈尊に救われる。こう言う事がありまして釈尊は一方から言えば、シュリハントクと言うようないくら言つて聞かせてもわからぬ者を根気よく導いてとう／＼覺の境地にはいらせるとか、カルダイ、これはもう仕様の無い程女が恋しくて恋しくてたまらんで、路傍にいい女が通るといらつしやいと云つて自分の所に引つ張つて行つて、抱いて見たりキスして見たりする。それを他のお弟子が釈尊に告げるものでありますから、釈尊はこん／＼とその本人をお誠めになる。その次には釈尊に言われたから抱いたりキスしたりはしなけれども、やつぱり女と話したいのか又女の人を引張り込んで話している。又お弟子達が釈尊に告げる、又釈尊が呼びつけてねんごろにお諭しになる。そんな事が続いている間にこのカルダイもとう／＼心が開けて、そう言う女への執着が転じて行くのであります。転じて行く、そこが面白いのであります。転じて見るとこのカルダイと言うお弟子は家庭に行つて家庭の問題をおさめてやるのに非常にすぐれた力があつた。始めは仕様

の無かつた人間がそう言う力を持つようになる。それがさつき申しましたように釈尊のみ教と言うものは、煩惱を転ずるのであつて煩惱を叩き潰してしまふのではない。そんな事なのであります。

ナンダを御教化

それから釈尊の腹違いの弟さんに当りますナンダ、この物語も面白いのでありまして、ナンダは新婚当座であのカピラ城の王位を受け継ぐと言う事になつていて、非常にうれしくしている。ソンドリ姫と言うのと結婚しているのがあります。釈尊はおいでになつて、ナンダより一しよに來いと言ふような事で連れ出しておいでになる。釈尊の行乞の鉢を大事に持つてあとについて行く。釈尊を祇園精舎まで送り届けて、もう帰れと言われるであらうと思つて、其処に止められてお前は今から出家せよとおつしやる。厭で／＼堪らんけれども釈尊の仰言る事はとても抵抗出来ない。それに従わずには居られん。いや／＼ながら出家する。出家の姿にはなつたけれども新婚まもない位のソンドリ姫の事が思われて堪らん。ちつとも修行なんか出来ない。そこで釈尊はお考へになつて、これから先少し伝説的になりますけれども、何とか言う山に山火事があり、猿が沢山その山に住んでいる。山火事で猿があらちち

けれども天上界の楽しみと雖も、必ず尽き果てます。その時にはナンダが真逆様にここに落ちて來ます」ここまで聞いて始めてナンダはハッと目が覺めたと言ふのであります。それはちつと面白い喩のようになっていきますけれども、とにかくそう言う風の経路を通つたのであります。結局ナンダは本心に心が落ち着いたのであります。う。釈尊のお弟子として励んで行くと言ふ事になる。そう言う事もあります。

阿難のこと

それからよく御存知であります。阿難を慕うセンダラの娘が阿難のあとを追つかけて來る。そして釈尊の所までやつて來ると釈尊がねんごろにお諭しになると、一ぱい着飾つていたセンダラの娘の着物や髪飾なんかが釈尊のみ教を聞いている間に、すうと皆無くなつてしまつて、釈尊の御說法が終る頃には立派な尼さんの姿になつたと御経の表面にはなつていますが、そうなつてから釈尊は「それでお前は始めて阿難の妻になる事が出来るよ」と仰言る時には、もうそう言う風の煩惱が転じていると言ふのであります。この話はまあその娘の母親が魔法使であつて、かよう／＼の魔法で以て阿難を呼び寄せたと言ふような面白いお話が、佐々木樵先生が書かれた御本に出ております

に逃げています。その中に一匹の雌の猿が居る。釈尊はその雌の猿を指差して、「ナンダよ、お前のソンドリと雌の猿とどつちが美しいか」と。ナンダは腹を立てております。

怪しからん、自分のソンドリとこんな雌猿の醜いのと較べたりして腹が立つので黙つています。すると釈尊はナンダを連れて天上界に行かれる。天上の宮殿に沢山の美しい天女達がいる。それをお見せになる。ナンダはその天女を見ている。天女の姿と言ふものは非常に美しくてみとれている。と、釈尊は「どうだ、この天女は美しいか。お前のソンドリと較べてどうか」と仰言る。今度は「とても較べものになりませぬ。この天女の方が遙かに美しくて」とお答えすると、釈尊は「この天女の一人は将来お前の配遇になると言ふ事になつていくがどうか」と言われる。そうするとナンダはうれしくなつてそれならソンドリなんかどうでもいいと男心でありますか、そんな氣持になる。今度はナンダを地獄に連れてお行きになる。地獄では一つの釜に湯をたぎらせて鬼がしきりに焚いている。そこには罪人の誰もいない。ナンダがその訳をたずねると「釈尊のお弟子のナンダと言われる。鬼にきいて見ると「釈尊のお弟子のナンダと言ふのが今に地獄に堕ちて來ますからその準備です」と言う。ナンダは人間の命が終つたら天上界に生れて天女と一しよになる筈なんだがと言ふと鬼が「それはそうです。

から御覧になつた方もありますでしょう。そう言う阿難と言ふ人は情の人で、これは釈尊の御入滅までなか／＼覺りが開けなかつた。一番釈尊のみ教を聞いた人で多聞第一と言われているのであります。けれども情の人でなか／＼覺りが開けなかつたのを、釈尊がおかくれになつてから後にコンゴージとか言う人の話を聞いて始めて覺りが開けたと言ふ事になつております。釈尊のお弟子にはこう言う阿難尊者もあります。

舍利弗と目連とハンドク

それから前に申しました舍利弗は釈尊よりも先立つて死にたい、釈尊の御入滅をとんでも自分は見る事は出来ない。釈尊の御許しを受けて自分の故郷に歸つて、まだその時迄生きていた老年の母親に會うて「私を生んで下された部屋をどうぞ見せて下さい」と言い、一方で母親に釈尊のみ教を説いてすつかり母親を仏教の信者にして、これで母親の御恩に報いる事が出来たと言つて非常によこんで、併し自分の生れた部屋を見て、ああここで生れてお母さんの御苦労になつたのかと言ふような事を考えたのであります。その場で血を吐いて死んでしまつたと言ふように伝えられておりますし、それから目連の方は、釈尊の教団では非常な働き人であります。実行に強い人でありますから釈

尊を憎く思っている外道か何かが、あの目連を殺したら教団が弱るであろうと言うので、目連が石切山とか言う山の下を通る時石を投げてさんざん叩き潰して目連が殺してしまつたとも伝えられています。或は目連がひどい傷になつてどうかこうか釈尊のお前まで帰つて来て、其処で死んだと言う風にも伝えられておりますが、とにかく目連は殉教の死を遂げたなか／＼強い人であつたのであります。

今さつき申しましたシユリハントクなんかは、どうしても覚りが開けぬ、愚かで愚かで仕様がなない。そこで釈尊はお弟子達の履物を掃除する事を命じた。そしてその掃除する時に『塵を払わん、垢を除かん』それを繰り返し／＼唱えよと仰言つた。その通りやつている内に、とう／＼シユリハントクと言う愚かな者も、塵を払い垢を除くと言うのは自分の煩惱の垢を除く事だと言う事に心が開けて来た。こんな事もありまして、釈尊の所にはあらゆる御弟子、優れた御弟子もあれば平凡な馬鹿なような御弟子もあつた。そんなのを皆いい工合に導いておいでになつたと言うところに、大教育者としての釈尊が仰かれますのであります。

ビルリ王のこと

釈尊の晩年の七十八才の時でありますか、例のビルリ王

が釈迦族を全滅すると言う事が起りましたのであります。

これはビルリ王のお父さんが釈迦族から妻を迎えたいと言うので釈迦族に申し入れたところが、釈迦族は非常に輕蔑して釈迦族の尊い女をやる事は出来ない、釈迦族の内でも卑しい女をやれと言う事になり、それを父の王が自分の妃にして生れたのが後のビルリ王で、ビルリ王が釈迦族の国自分の母のお里の国に行つて見ると、皆から輕蔑のまなこを以て見られている。卑しい女の生んだ子供だと言う事で訳がすつかりわかつて、ビルリ王は釈迦族に対して非常な恨みの心を持つようになったものでありますから、釈尊の七十八才の時に釈迦族を全滅すると出かける。釈尊は二度程は路傍に立つていてそれをお止めになつたと言うのであります。ビルリ王がやつて来ると釈尊が樹の蔭に立つておいでになる、ビルリ王と雖も釈尊が尊いと言う事はわかっているものだから「そこにどうしていらつしやいます」と聞くと「王よ、親族の蔭は涼しい」と言うような事を仰言つた。そこでビルリ王ハツと氣付いた、これは釈迦族が全滅したら釈尊はお淋しいなと。そこで軍隊を率いて引き返します。二度迄は釈尊のその御言葉によつて引き返しましたけれども、三度目にはどうにもこうにもならなくなつて、釈迦族の国にはいつて釈迦族を片つ端から殺してしまふと言うような事で、釈尊の晩年と言うのは非常にお氣の

毒な淋しい事なのであります。それから二年あとで釈尊は天寿を全うして八十才でおかくれになるのであります。ところがこれについてこんな事がありました。二十何年前であります。私大阪の学校の先生のお集まりに夏の講習に行つて釈尊の事を話した事があります。今のビルリ王の話なんかしました。終つて講師の控室に帰つてまいりますと、若い視学さんだつたようであります。憤然として私の所にやつてまいりまして、釈迦族が全滅したと言うのに釈尊は何故自害なさいませんかと私を叱るのであります。私も氣が立つておりましてから、人間は死ぬばかりがいいんじやありませんと言つたら、そんな事を聞くと腹の中が煮え繰り返るように腹が立つとあんまり怒られますから、イヤ日本の国がどうかなる時には私も考えますと言うような事で、その場はおさまりました。それから昭和二十二年のたしか十月頃でありました。大阪府立何とか高等女学校長、その人であります。自分はこの度この学校の校長になりましたがどうぞお出でを願う。そして生徒全体、それから父兄の集りにも話して頂きたい、と言う手紙がまいりましたから、これは行かなくちやならんと思ひまいりました校長室にちよつと待つていましたら校長さんがはいつて来て、私の前に頭を非常に低く下げて、日本の国がこんなになつたのに私は自殺してはおりません、と言つて御詫び

をなさつた。その方も私と同じく一時は追放の憂目にあわれたようでありましたが、そう言う事もありまして、併しながら私もこんなに自殺をせずにおります、終戦直後に自殺なされた世に優れた軍人の方々には本当に敬意を表します。

念願

併し、本当にその時言いましたように、自殺するばかりがいいのじやないと言う考もありましてまあ今日迄生き長らえておりますが、私の微力ではどうにもなりませんけれども、どうぞこの大乘仏教、釈尊のこの成道の曉に開けたと言うところの御心と言うものが、日本国の人々に先ずわかり、その響が伝わつてだん／＼西洋にもそう言う心持の仏教と言うものが伝つて、印度に於いては今申しましたようにこれに呼応する人々が段々多くなつて来ておりますから、どうぞそそう言う仏教の力に依つて本当の世界の平和と言うものが実現されて来ますようにと、そう言う事を私の念願と致しております次第であります。

そう言う事でまあ釈尊の御一生、成道のお覺りの心持を中心としたところの釈尊の御一生と言うものが、非常に大事な事を私共に教えて下さる。そして私共はもとより釈尊のような覺りをそのまま開く事はなか／＼六つかしいので

ありますけれども、法然上人・親鸞聖人を通して釈尊の御心持が私共にも響きますような道が開かれてあるのではありませんから、どうかそう言う方面に於いて、自分のこの世に生きている限り、そういう道を微力ながら辿って行きたい

と言う事を思っております次第であります。まあそう言う事を今晩申し上げまして甚だ不十分でありますけれども、成道の日の記念のお話と致したいと思つた訳であります。

三六・十二・八

池山先生廿五回忌に

(二)



花田正夫

我ならぬきよの我の我にありて
穢惡の我を我にしらむ

この一首は大正の末頃先生の住吉時代のお作で、『信を行く旅人』の中に次のように述べていられます。

『これは私の近詠です。きよらとは清浄ということです。清浄の我が、私の中にある筈はありません。若しあるとすると、それは私ではありません。』

しかし私に、私の本質が穢惡の我とどうして知れるでしょう。それをそうと知らせるのが、きよらの我ではありますまいか。私ではないきよらの我が、いつ私の中にはいつたのでしょうか。それは一声「念仏もうさんとおもい

たつころのおこるとき」にはいつたのです。子を思う母が、子の中にあるように、私を思うきよらの我は、私の中にあるのです。そしてその選択摂取の白業をもつて、私の無明煩惱の黒業に对照せしめて、私に「穢惡汚染にして清浄の心なく、虚偽諂偽にして真実の心なし」と気づかしてくれるのです。貧瞋煩惱の中に生ずるといふ清浄願往生心、とはこの我ならぬ我のことを指すのでしょうか。或は本願廻向の大信心といつたり、或は如来選択の願心といつたり、或はまた一口に信仰といふ念仏というのも、つまり別のもではないでしょう。即ち信心の念仏が、我ならぬ我な

のです。……』

また『仏と人』の中には、この「信心の念仏」を次の様に述べていられます。

『念仏は自省をうながす。念仏は鏡である、淨玻璃の鏡である。見る人の真相をうつし出さずには措かない。念仏の鏡以外の鏡、例えば世間道德の鏡では、見る人みずから、目を掩わずにはいられない醜さも、おめず臆せず、見つめることを許すのは、念仏の鏡の特徴である。〃かねてしろしめして〃の念仏にむかつては、いささかの遠慮会釈なく、自分を見下げてはてることが出来る。私はこれを、念仏の洗悟作用と命名する。洗悟とは八どうだね、おまえの本来の姿がわかるかね〃と、さとするという意味である。』

念仏は自省をうながし、自省は念仏の意義を深める。例えば、富士山は何万尺あると聞いても、聞いただけではその高さはつきりと想像することも六つかしいが、近く寄つて見上げれば、一目で測り知ることが出来る。が海——海の方は山の高さに比して、より深いところがあるそうだが——海の深いところは、目で見ただけではとんと解らない。しかしこの海のこのところは、富士山だけの深さがあると聞けば、富士山の高さを見た目で、その海の深さを想定するのは難くない。わが身の煩惱の

富士の山ほどの高さに呆れ、それを包容して余りある、本願海の念仏の深さにも呆れずにいられまい。して見れば煩惱の高さは、念仏の深さの秤である。一方が高まれば高まるほど、それと正比例して、他の一方が深まる。念仏への信知が、高まり、若くは深まるにつれて、自己の真相への観察が深まり若くは高まつてくる』道德的善人は、心の奥に堅く扉を閉じて、決して見ようとしないうちに自己の真相を、無窮の願力に保証せられる他力の念仏者は、底の底まで省みることが出来る俸せを得るのであります。その念仏の妙用を讃仰された歌であります。

慘怛たる悔いの残せし一一の

あとかたもなき無碍の一 道

この一首は、先生の京都蓮華谷時代、六十にお近い頃のものかと思ひます。この歌を示されて次のように語られました。

『五十を過ぎると、どうしたことか時々、どうにも寝つかれない夜がある。丁度先日もそうした夜にあたつて、一時、二時になつても眠れない。……眠れないままに過去の思出が次から次へと走馬灯のように心に浮かぶ。そして、あの時、その事と、誠に申し訳のないことの数々

が思い出されて、やりきれない後悔の跡が、爆撃あとの戦場のように惨怛としてひろがる。それでもまだ相手の人が生きていると、何かおわびの仕様もあるが、既に亡き数に入られた人々には、どうともして見ようのないやる瀬ない後悔が心を塞ぐ。……そうした心の闇に出あう時、何処か遠くから一筋の閃光がさして来る、灯台の火が暗い海面を照らすようなひかりである。それが段々と強く大きくあかるくなつて、やがて光明の広海に浮び出される。すると不思議にも、惨怛たる後悔の瘡跡はあとかたもなく消されている。恰もそれは浴客に散々に汚された海水浴場も、一度満潮の波浪に流われると、すがすがしいものと浜辺にかえるようである。そうしたところを歌にして見たので、これは、過去に対する無碍光のめぐみとも云えようか』

たのまるるただ念仏のわれにあり

さるべき業はさもあらばあれ

この一首は、六十になられた年頭のお作であります。

『仏と人』の中に、次のように解説していられます。

『数年前の新年劈頭の偶感である。不可避の業縁の暴威を、念仏のたのもしきに受け止めて、行路難の人生を切

り抜ける覚悟の出来た端的を詠んだもの。或る意味に於いて念仏者の主観に映つた無碍の一道とも見られようか。

この「ただ念仏」である。私の臨終——となるかもしれないと思つた病床に、山の端を出る月のように、ぼつかり影を見せたのは、そしてわたしに附きに附いて離れないで、八俺には念仏がある」と豪語させたのは。……』

先生の御存命中は、正月二日には必ず先生のお宅に念仏の友が集つて、身心共に温めて頂くのが常でありました。

その席上にこの歌を発表せられ、

『人生五十と云うが、もう六十になつた。すこしは楽になつたかと省みると、それどころではない。年々歳々、のつびきならぬ苦勞が増している。この年頭、先ず仏前に坐つて、御礼を申すありのまゝの私の姿が、この歌である。』

「さるべき業」、身に持った業は、身から出た錆で逃げようはない。この業報を受け止めさせて頂き、人生の難行路を切り抜けさせて頂けるのも「たゞ念仏のたのもしさ」あればこそである。しかもその念仏は「私一人のため、かくの如きの私がための念仏」である。』

思うに、この一首は、念仏無碍の光明が、私共の現在か

ら未来にかけて蒙る、そのめぐみを讃えられたものであります。

その当時『歎異抄』の第七章

「念仏者は無碍の一道なり。そのいわれ如何とならば信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報を感ずることあたわず、諸善も及ぶことなきゆえに、云々」

を引用されて『この章の一言一句がそのまゝ身に味わわせ

斉藤与一郎

翁



桑野淳城

本間孝契兄の案内で昭和卅年八月廿日斉藤翁を訪れる。

翁は八十四歳といわれるのに、六十五、六歳のお元氣で和顔愛語せられる。生国は新潟県、少年時代に函館市に來り、医師の書生となり、艱難辛苦、粉骨碎身、遂に歐洲に遊學、とくにドイツに留學。飯朝して公立病院の建設、病院長、図書館長、教育長、市長、短大学長等を經歷せられた。これよりさき北海道開発に全身を打ち込まれ、その

功績甚大なものがあり、明治天皇、各宮殿下から羽二重羽織等の御下賜もつけられている。昭和三十三年に、翁の伝記大巻が刊行された。

さて応接間に案内せられると、

「昨夜二僧の御姿の夢を見ました。貴僧のお姿でした」とじつと顔を見て御座る。やがて

「昨日京都から自画の観音菩薩が表装せられて送つて來

たので、今朝床に掛けました。

今日御来宅下さったのは、はからずもこの観音菩薩の開眼にお出で下さったので、誠に尊い御縁であります。………

と非常なおよろこびであつた。

翁は語を続けられて

「華嚴經を読み終り、今は阿含經を読んでゐる。仏教は三世因果の道理を説いてあるのであるが、華嚴經を説かれた時釈尊の弟子達は何が何だかさっぱりわからず、譬の如く、啞の如く、茫然としていた。

そこで釈尊はいかなる人々も体得出来るように、譬喩や因縁をもつて阿含經を説いていられる。

仏教は応病与藥の教で、三世に通ずる無碍の大道を精進する方法、即ち生老病死の四苦八苦を開発して永遠に生きぬいてゆく道を教えてあるようですね………」

又翁は机上の本を手にとり、私に示して物語られた。

「これは友人、池山栄吉君が、ドイツ語で書いた歎異鈔であります。直接親鸞聖人に接するので本当に有り難い。今日は親鸞々と猫も杓子も云つて、歎異鈔の講本も沢山出版されているが、我田引水で、小賢者の我利我見で、聖人の真生命を見出すことは困難で、まことに

迷惑いたしますが、この池山君のドイツ語の歎異鈔は、歐洲の人々にも多く読まれ、聖人を釈尊と同じ、世界の偉人、大哲学者として尊敬されるようになりました。仏教の教理は、幾千人の大学者が寄り集つて研究しても結局、有限者では、絶対の真理に到着することは不可能である。

仏教は研究するのではない。覺者に接するのです。親鸞は染香人、希有最勝人とのべていられる。自然と香りが薫じてくるのです。父子、兄弟、夫婦、友達が互に通じてくるようなものです。

池山君は信心篤い家に慈育せられ、幼少の時、母上は八人間に生れたゆえんは信心なければ宇宙のウジ虫同様の。真剣に求道が大切である。財産や地位や、学問名譽などは風前の灯火である。V

△親子、夫婦、兄弟も朝顔の花と同じである。蓮如上人は白骨の御文章に我身の無常の迅速を告げ、釈尊は、人は愛欲の世界にあつて、独生独死、独去独来、荒野にただ一人立つていとおしえられている。お前がどうしても信心よるこぶ人になれなかつたら、お前が何処に居つても還相廻向で一番に救うてあげるVと。生活そのままが信仰、信仰と生活と即一の慈光の家庭に育てられた池山君であつたので、池山君全体が南無阿彌陀仏、南無阿

彌陀仏が池山君と、如来と一体である。だから池山君に接していると、自然に、如来が池山君の息となり、香りとなり、薫じてくる。誠に尊い希有最勝人、妙好人、染香人、正定不退転、弥勒菩薩として讃仰されている人である。

真の念仏者は、国境を越え、人種を超え、大融和され、同一念仏無別道故、四海通ずるに皆兄弟なり、の趣がある。それであるのに、現在の教団は宗派も越えることあたわず、我他彼此と、ウジ虫と何ら異ならない、あわれむべしいたむべし、南無阿彌陀仏。」

○ 「池山君は、本願招喚の勅命『汝一心正念直来』の左側に仮名をつけ、

オネガヒダカラ スグキテオクレヨ
如来招喚の声、南無阿彌陀仏は、お浄土からの如来の名告りで、オネガヒダカラスグキテオクレヨの他にない」

○ 「聖人は釈尊の出世の本願は、唯説弥陀本願海とのたまう。その本願は大無量寿經に、真実如来の本願が説かれてある。この經の大意は、弥陀誓いを超発し、広く法蔵を開き、凡少を哀んで選んで功德の宝を施したい、釈

迦世に出で給うて、教法を説き、群萌をすくい、恵むに真実の利をもつてしようと思召されたことである。ここを以て如来の本願を説いて經の宗とし、仏の名号を以て經の体とするものである。

即ち、如来はオネガヒダカラスグキテオクレヨの南無阿彌陀仏の御呼声の外になにもない。」

○ 「善財童子が五十三の善知識を求められた忍終不悔の求道は、信心の活躍として、法爾自然に躍動するのでなければ、仏教も床間の飾り、或は死骸となり、骨董化する。印度仏教が滅亡に帰したように、日本仏教も、現にそのように随落しているのではないでしようか」

○ 翁から大鉄棒を頭上にうけて、聖徳皇、観音菩薩の今現在の御説法を諦聴した。ああ、遇い難い真の知識に遇い、聞くこと難い如来本願のみ法を聞き、特に如来の恩徳の深いことを知らされた。南無阿彌陀仏 合掌

(追記・翁は昭和卅三年頃逝去されし由、伝聞。)

教えられる二つの言葉



松 村 繁 雄

仏法は十方衆生の為にあると同時に私一人が救われる為のものであります。従つて、人には各その因縁によつてそれだけの領解があつて然るべきものでありますから、他人

の領解をその言葉尻を捉えて兎や角と批評するような事は、飛んでもない逸脱であるばかりでなく不遜も又極まるというものであります。故に、そのようなことは堅くつつしまねばなりません。然し、私の領解がどのようなものであるかを深く反省させて頂くには、人様のお言葉によつて教えられることが大切でありますから、私はここに次の二つの言葉を拝借してそれを翻味させて頂きたいと思ひます。

私の知人にKという大学の先生があり、その方は自他共に許すお念仏の方であります。去年の暮に某医大の附属病院に入院され、一時は御危篤であつたと聞きましたのでお見舞状を差し上げましたところ、過日小康を得られて御返事が参り、その中に次のようなお言葉がありました。

堅持する」ということは全く反対の「感謝報恩の気持ちの起つてくれない奴」ということであります。

併し「悪人正機」のお慈悲であるからとて「感謝報恩の気持ちがなくてよろしい」という事であらう筈がなく、私も、「感謝報恩の気持ちを持ちたい」ということは何時も思つており、「よろこびたい」ということは常に願つておりますが、では、一体私には「感謝報恩のころ」即ち「よろこび」というものが有るのであります。無いのであります。

仏法は「救われる」ことでありますから、救われて見ればそこにはよろこびを生ずるのが当然であります。ところが、その場合のよろこびは「救われることが嬉しい」のであつて、「よろこべる」ことがうれしい」のでは無い筈です。即ち、救われる故によるこぼすにはいられないのが感謝であつて、感謝の心が有ることによつて救われるのではない筈です。然るに私のよろこびというものは「よろこべるようになつた事をよろこんでいる」ではありませんか。

抑々、私が道を求め仏法を聞くというその事自体が「仏法を聞いて楽になりたい」、「よろこべるようになつて立派に世渡りしたい」という欲の心でありはせぬか。故に、たまたま仏教の教説を聞いて少々道理が分ると、「人生は是だ」という自己安心に陥り、そこによろこびらしいもの

「危篤の中でお念仏は出なかつたが、感謝報恩の気持は堅持したらしく、意識不明の間の模様を聞いてよろこんでおります」

危篤の中にあつても感謝報恩の気持を堅持する——ということとはまことに尊いことでありまして、出来るものなら私もそのようにありたいし、若しそのようにあり得たら嬉しいことでもありますから、K先生のこのお言葉に対しては、さすがにと敬意を表します。

さて安波先生は「死の宣告をうけて」という世にも有り難い教訓を遺して往生せられた方ですが、先生は絶筆として次の言葉を遺して往生せられたということであり

「仏のお慈悲を有り難く思ふようになったことが有り難いのではない。有り難く思えぬ奴を相変らずお相手下さることが有り難い事である」

「有り難く思えぬ奴」ということは、「感謝報恩の気持が生ずると、そのよろこびを握つて「われはよろこべる」という自己満足に墮し、それを以て「信心」と思い違ひをする。それが私であります。

即ち、常に「よろこびたい」、「ラクになりたい」と願うている故に、たまたまよろこべるとそのよろこびを握えて「よろこべた」とよろこび、よろこべない時は「どうもよろこべない」と悲しむ。それが私であります。するとK先生が「危篤の中でも感謝報恩の気持を堅持した」とよろこばれる事は、K先生の問題ではなく私の姿であります。それでは救われるお慈悲に脊を向けて——それは少しもよろこばずに——おのれの行動を自ら賞讃していることではありませんか。それでは親の心を仰いでいるのではなく——感謝しているのではなく——親心には脊を向けておるのではありませんか。それほどの不孝はありますまい。それほどの不感謝はありますまい。

抑々「救われる」ということは、沈み切つて浮かぶ瀬のないものが岸上に抱き上げられることであります。故に、沈んでいないものには助けられる必要もないし、「沈んでいる」と言う自覚のないものには救われるよろこびのあらう筈もありませんが、では、「沈み切つて浮ぶ瀬がない」とはどういうことであります。

親心には脊を向けておりながらそれでも孝行が出来るよ

うに思い——感謝しているように思い——それを間違いと
気付かない。即ち、沈んでいても沈んでいると知らない、
間違つていても間違つていないと知らない、それが沈み切つ
ている私の姿でありましょう。「よく／＼案じ見れば天に
おどり地におどつてよろこぶべき仏のマコトであると道理
では分らせて貰つても、それはよろこばずに、煩惱の欲し
がるもの、即ち「よろこびたい」と思う煩惱のよろこびを
つかまえてよろこぼうとしているのが私であります。まこ
とに、「如来のご恩の高きことをば沙汰なくして我も人も
よしあしをのみ申し合う」てお慈悲はよろこばぬ奴、それ
が沈んでいる私の姿であります。

それでは「仏のマコト」とはどういうことでありまし
うか。そのようにどこまでも煩惱に狂わされて、よろこぶ
べきことをよろこばぬ奴、悪性更にやめ難く心は蛇蝎のご
とくにして、どこまでも間違うより外に途のない奴、曠劫
に流転するより外に途のないこの私を憐み給うて「煩惱具
足の凡夫よ」と呼んで下さる御親切、「有り難く思えぬ奴
をどこまでもお相手下さる」御親切であります。まこと
に、「よく／＼案じ見れば天におどり地におどつてよろこ
ぶべき御親切」であるものをそれは仰がずに、どこまでも
自性唯心に沈んで「よろこべた」とか「よろこべぬ」とか
言い合っているのが私。「聞き聞けど変らぬ我が機を知り

堂の鈴 (四)

柏崎の茶舗(一)

翌日お藤は帰るといふ。信哉も直江津の宿を引き払つて
柏崎の店まで送つて行つた。信哉は老父母の望みにまかせ
てしばらく泊つた。一郎は何となく信哉を避ける様な素振
りである。

折を見てはお藤に

信哉「貴女は一郎さんの立派な奥様です。どんな事があつ
ても家を出なさんな。法律は貴女の承諾がなければ離婚
は出来ないことになっています。妻の権利は法律が立派
に守つてくれます。如何なる事があつても離婚だけは決
してなさらぬ様に……。しつかり覚悟を定めて、絶対
の真実心にひかれて、他人の非難をおそれず、甘言に惑
わされず、くよくよせず、何処までも柏崎の家を守り通
して下さい」

お藤「ハイ、そういたします」
とまともに信哉を見た。

ながら変り求める心つきせぬ——この私をかねて知ろし
召されて「よろこぶることそらごとたわごとまことあること
なき煩惱具足の汝よ」と呼び給う、それが仏の御親切であ
りました。

「よろこぶべきことをおさえてよろこばせざるは煩惱の
所為なり、然るに私かねて知ろし召して煩惱具足の凡夫
と仰せられたることなれば他力の悲願はかくのごとき
われらがためなりけりと知られていよいよたのもしくお
ぼゆるなり」

よろこぶべきことをよろこばぬ——有り難く思えぬ——こ
の私が御本願のお目あてでありました。

今、ここに気付かせて貰つて見ると、沈んでいるのは私
であり、助けられるのも私であり、弥陀の五劫思惟の願は
全くこの私一人のためでありました、是をどうしてよろこ
ばずにいられますよう。そうして、このよろこびというも
のは、ひとえに仏の深い御親切によつて賜るものでありま
す。「たま／＼行信を得ば遠く宿縁をよろこべ」。まこと
に、仏智の深さを、強さを、仰ぎ知らされるばかりであり
ます。

感謝報恩の心を堅持して助かるのではなく、感謝報恩の
心を堅持出来るもののように思い違ひをしているこの間違
い者を憐れんで下さる御親切に助けられるばかりでありま
す。思えばK先生の御言葉も私を照らして下さるものであ
り、安波先生の御言葉も私への深い御教化であります。有
り難うございます。南無阿弥陀仏。

佐藤強三郎

此の家ではお藤が熱心に信哉の話を聞こうとするので、
老父母もそれを察して、進んでその機会を作つてやつた。
そして出来るだけ共に聴聞した。そのためにお藤は家の仕
事を後廻しにしても信哉の話を聞くことが出来た。

信哉「今から七百年も前に、唯円房という人が、親鸞聖人
にお会いして、生れて初めて本願他力真宗の教を聞き、
安心された。そして晩年に歎異抄を著し、それが今日非
常に普及しています。その本に、

△親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまい
らすべしと、よき人の仰せをこうぶりで信ずるほかに別
の子細なきなり。念仏はまことに浄土に生るるたねにて
やはんべらん、また地獄におつる業にてやはんべる
らん、総じてもて存知せざるなり。たとえ法然上人にす
かされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さら
に後悔すべからずさうろう。そのゆえは、自余の業をは

げみて仏になるべかりける身が、念仏を申して地獄にもおちて候わばこそ、すかされたてまつりてという後悔も候わめ、いずれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかしと書いてあります。……これただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし、……これは唯念仏です。自分のはからいをして、仏の本願に信順して念仏するのです。」

信哉「親鸞聖人はすかされたとて後悔せぬと申されてある。それほどの信仰はどこから出て来たかというにそれは弥陀の本願を信ぜられたから、法然聖人を信ずることが出来たのです。」

もし仏の本願を信ずるところが欠けていたならば法然聖人が人間として如何に立派なお方であつても、無碍の信仰は出て来ないでしょう。

△私は親の恩さえも感ずることの出来ない者ですから、仏様の御恩などはなおさら解るわけがないと思つていますと云うものもあるが、それはあべこべで

仏の御恩で夜が明けなければ、親の御恩はわかるわけがない。……と、私は聞いています。というのです。

尽十方無碍光如来の本願力が無限であるから、無碍の信

たのむ衆生をたすけたまわんとの本願にて候

よろこぶ、とは、信を得て、仏の無碍の本願に感謝する姿である。信を得なければ、根元が立たないのであるから、悦んで見様がな。感謝の源泉がなくて悦ぶとは、それは空念仏、ぬか喜びで、人真似だから根がないのだ。信心決定しなければ、悦べる筈が無い。」

信哉「貴女が一郎さんを救おうとした事は誠に良いことです。然しそれが、思い通りにやり遂げる事が出来なかつた。又お小夜さんを恨むのは悪いことだから、恨むのを止めようと心掛けたのですが、その恨む心を無くすることが出来なかつた。これが自力作善では徹底することが出来ないから、本当の安心が出来ないという事です。最後に残るものは、思う事をやり遂げることの出来ない無力の自分だけとなります。」

さて、かく悪い無力な者となれば、人が呆れてしまうだろうと、卑屈になり、人を隔てる様になつて来ます。こうなることも当然のことです。なぜならば、自分が以前に、悪い人を馬鹿にし、呆れ、遠ざけて来た経験があるからです。然るに、いよく自分が悪いとなれば、今度は逆に、自分が人に呆れられるだろうと思う。人間社会

仰となるのである。御和讃に、

信は願より生ずれば、念仏成仏自然なり、自然はすなわち報土なり、証大涅槃うたがわずとあります。信仰は本願より生ずるのですね。

昔、蓮如上人は△夜が明けて陽が出るか、陽が出るから夜が明けるか、どちらか△とお問ひになつたが、聴聞の者は、心配顔をして返答をする者が無い。そこで蔵かに△陽が出るから夜が明けるのだ。本願があるために信心が生じ、夜が明けるのである△と仰せになつたということです。

闇の夜に、家の中で、ロソクや電灯をつけて、明るくなつたとか、いやまだ暗いところがある、と騒いで居るが、一度太陽が出れば、夜が明ける。

夜が明ければ、家の中もよく見える。よく見えて来れば上下、左右の秩序がはつきりとわかるから、おのずから各々そのところを得て、整然となつて来る。

蓮如上人御一代聞書の二二〇条に、

「信をば得ずして、よろこび候わんこと、たとえば糸にて物を縫うに、あとをそのままにて縫えば、ぬけ候ようによろこび候わんとも、信を得ずばいたずらごとなり。よるこべたすけたまわんと仰せられ候ことにもなく候。

は皆互に、そうだと思ひ込んでいるからです。そして人を隔て、人を離れ、遂に失望落胆して苦しむのです。

その時に、貴女の成し遂げ得ざる事実を見、それに同情して、それは貴女としては、いくらやろうとしても出来ないのだ。貴女はそれが出来なければ自分を卑下し、人を隔てて、孤独で苦しむであらう。そして益々人を妬み人を恨む様になつて行くであらう。そういう性分で生れて来た事を哀れんで、何処までも呆れないというのが、仏の不思議の本願です。

貴女に良くせよというのでもない。悪いから駄目だと呆れるのでもない。虚仮不実の者を憐んで、どこ／＼までも呆れぬというのです。助け遂ぐる迄は、すてて置くわけに行かぬ、と、向うで待つていて下さるのです」

信哉「唯円房が、何れの行も及び難い身として、とても地獄は一定すみかぞかし、即、どうしても人のために犠牲になることが出来ない。名利の塊である。清浄の心は更

にない。自力修善で安心する事の出来ない、地獄必定の自分であると感じて苦しんで居られた。その時に、

△弥陀の本願には、老少善悪の人をえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。そのゆえは、罪惡深重、煩惱熾

盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまざるべき善なきゆえに、悪をも恐るべからず弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに。V：歎異抄第一章と、教えられたのです。

そこで、今迄の方法をやつて見ても徹底して安心する事が出来なかつた自分の事を、仏かねてしろしめして、助けんと誓ひ給うたのであつたのか。そうとは今まで知らなかつた。この本願の誓にあわなければ、地獄へ行くより仕方のない自分を、そうまで言つて、待つて居て下さつたのであれば、その教を信じて、念仏して地獄へ行つても更に後悔する事はない、と喜ばれたのでしよう」

信哉「歎異抄、第十六章に、

△一向専修のひとにおいて、廻心ということ、ただひとたびあるべし。その廻心とは、日ごろ本願他力真宗を知らざるひと、弥陀の智慧をたまわりて、日ごろのこころにては、往生かなうべからずと思ひて、もとの心をひきかえて、本願をたのみまいらすをこそ、廻心とは申しそうらえV即、弥陀の智慧をたまわるから、本願をたのみまいらせる様になる。と申して居られる。

又、御和讃に、

尽十方の無碍光は 無明のやみをてらしつつ

火裏の蓮

聚墨生

涅槃経に「火裏の蓮」とある。煩惱の火焰の中にあつて焼けず失せない無碍の光徳を讃えられた金句である。

Y君は今年廿五であるが、高校時代から肺を病み自宅療養を続け、其後療養所に入り、遂に手術となつた。ところが開胸して始めて万人に一人と云う肺葉の畸形で手術不能とわかり、そのまゝ縫合された。その傷が癒えた頃医師から始めてその実状を聞き、全く絶望のどん底におちて「顔面白くもない、タタタ」と云いながら絶望に近い心況が一年、二年と続いた。然しお母さんの慈愛の涙に慰められつつ仏書だけは手から放さなかつた。そうしてゐるうちに幸にも近角先生の常持語

「どこまでも、どこへまでもお呆れのない御真実！」の一句が深く身に沁んで

「自分の様な浅ましい者に、かくまでのお慈悲よ」と氣付き、見失いかけた自分をとりもどし、傷跡をいたわりながら、念仏に帰つて、再び医師の指導をうけながら、職業輔導所に通うまでになつた。これ正しく火裏に薫る一輪の蓮華であらう。

又N夫人は三人のお子の母で、五十近い方であるが、終戦の頃却推カリエスと診断され安静を命じられたけれど、当時、上のお

一念歡喜するひとを かならず滅度にいたらしむ滅度とは、此の世の苦悩を滅し、極楽へ度るといふのである。

願力無窮にましますば 罪業深重もおもからず
仏智無辺にましますば 散乱放逸もすてられず
煩惱にまなこさえられて 摂取の光明見ざれども
大悲ものうきことなくて 常にわが身を照すなり
と、和讃を拝唱した。

その様子は、人に聞かせているのか、自分に言っているのか。世をも見ず、人をも見ず、只頭を垂れて、静かに、ゆつくりと、念仏しているばかりである。

お藤も思わず、南無阿弥陀仏と、お念仏した。

あ る と き

木蓮の花が
ぼたりとおちた
まあ
なんという
明るい大きな音だつたらう
さようなら
さようなら

——暮鳥詩集より——

子が二人ともに病弱で、その看護で四、五年の間無理に無理を続けてゐるうちに、遂に動けなくなつて了われた。

それから六年間、身辺三尺のものが取れるだけの病臥生活、まだ幼い長女が寒い朝、炊事をする姿にも、時々訪れて何かと世話をして下さる老母堂の姿にも、涙はつきなかつた。

ところが安静六年を経たので、すこしは恢復に向つてゐるかと思ふ。ほのかな希望をもつて再診を乞うと、

「このままでは駄目、今迄の胸推に加えて腰推も犯されている。残る唯一の道は大手術だけ」

と宣告された。そこでとうとう厚い壁にぶつかり、「大手術であるから、衰弱しきつた身には駄目かも知れぬ。永い間不自由かけた主人にも、苦勞させた子達にもすまぬ。手術は怖い、どうしよう」と、風も夜も懊悩苦悶。前には死の谷、後は絶壁。息も絶え入るばかりであつた。

その時「念仏申すことがたすかることだ」という師の一句がひよつこりに浮び「あゝそうだ、お念仏」と心が定まると共に、念仏と共に胸がひらけ落着を取りもどされた。

その年の四月「長女の高校入学許可を見てのちに入院し、相変らず、死は怖く、別れは淋しいけれど、如来に護られ、念仏のたのもしさに支えられて、耐えて頂く」というお手紙を受取つた。

ここにも「火裏の蓮」を仰ぐ。

永観律師の「病は善知識なり」の金句も想ひあわせられ、自身の病軀を省みさせられる。



あとかき

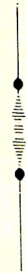
五月晴の空、緑の野山、老いも若きも血の躍る好季となりました。四月初めには北米サンジョセの山川夫人が来名され一時間余り談合いたしました。戦后十二年前と今度で二度の母国訪問でありました。

「終戦後は在米日本人はどうなるかと案じていましたが非常によくなったので、皆元氣一杯。又十二年前の日本と現在の日本はすっかり見違える程立派に復興しているのので力強く思います。米国の仏教徒は心を合せてその興隆に努力して、開教使の方々は大多忙、」等々いずれも明るいニュースでありました。二人してサンジョセの北条開教使の御健闘を祈念いたしました。

次に、大連から引揚げられ、一時は非常に御苦労なさいましたが、現在は一家皆様がそれ／＼安定されました川野夫人が中旬に来庵されました。七十になつて、盲人のために点字を学ばれ仏書の点訳を續けておられ、今度は池山先生の「絶対他力と信仰」を訳するといつて、元氣な話をせられました。点字奉仕者には、奈良の竹田法師がおられました、中風で亡くなられました。東京には宮本夫人が、病氣恢復すれ

ば、近角先生の「親鸞聖人の信仰」を点訳したいと、祈念して居られます。愛生園のAさんは、病で失明せられて以来、仏心にめざめ点字を学んで、失明の友の杖となつていられる方であります。

地上のひかりはとどかなくても、仏陀の無碍光は必ずや大いなる光を点じて下さることを確信し点字奉仕者の聖業を心から謝しまつてあります。



△近角先生の教行信証の御講話、「三信釈」をこれから引き續いて頂きます。教行信証中の一番かなめのところであります。古今独歩の親鸞聖人の信味を存分に味わわせて頂きましょう。南無阿彌陀仏。

△斎藤翁の御話は、桑野淳城師著『波間の白道』から頂きました。桑野師はこの書の一節に

「私の七十年の生涯は波瀾万丈、一定の住家なく印度、中国、日本と三国仏跡巡礼の旅のようでもあり、水鳥の路なき路を染につむように業縁に引かれるまま三ヶ年病床につき、仏陀の慈涙を思い、一息々々お念仏に力づけられ法藏の血潮で書き綴り集録して『波間の白道』が出来ました」と記されています。

私は大連で親しくお目にかゝりお提攜を蒙りましたが、不思議にも足利老師を紹介

信交を再び頂きました。恵まれた御縁であります。

△松村繁雄様は念仏の御縁深く桃林師や近角先生の御育てをうけられた方で、郷里に法灯を掲げて、念仏の中に健闘して居られます。

◆御案内

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半。一道会例会。

○毎月廿四日、午前午後、市内昭和区小桜町教西寺、法話会。

◆筆者の御住所

東京都世田谷区上北沢三丁目一三一二
新潟市関屋堀割三ノ十一 福島政雄
福岡市姪浜町茂木病院内 桑野淳城
山口県大内町仁保 松村繁雄

定価 一部 二十五円(送共)

半年 百五十円(送共)

一年 三百円(送共)

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区駄上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番